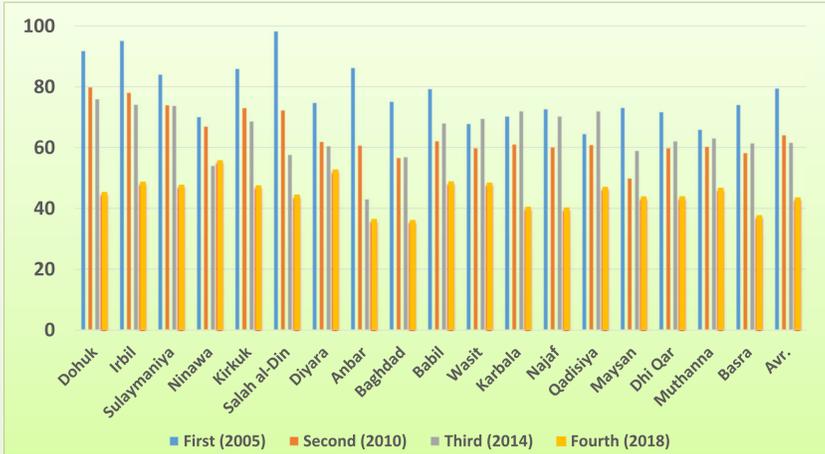


ポスト紛争社会の政治動員と投票率の関係

—イラクにおけるフィールドサーベイ実験から—

浜中新吾(龍谷大学)・山尾大(九州大学)

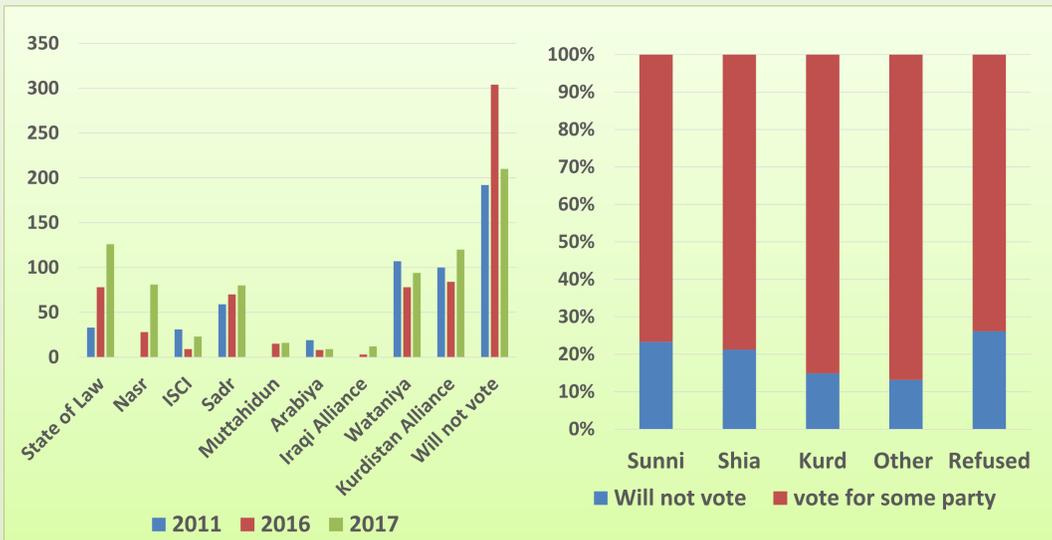


背景・目的

出発選挙で見られた高い投票率は、なぜ著しく低下したのか？大きな体制変動の後に紛争を経験したイラクを事例に、政治動員と投票参加の関係を、フィールドサーベイ実験によって明らかにする。

ポスト紛争社会では出発選挙における大規模な政治動員による高い投票率、その後の選挙での投票率低下傾向が共通して認められ、イラクはその典型的事例である。

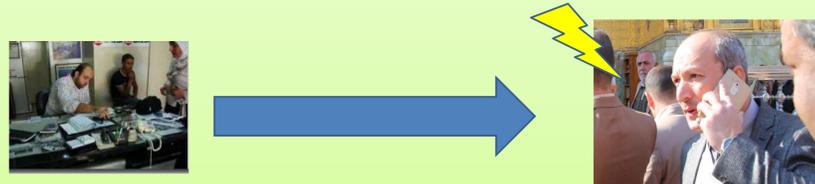
政治動員に関する先行研究では、平均的にみて動員が投票率を引き上げる効果があることを示している。ではイラクでも政治動員は投票参加を促進するのか。あるいはポスト紛争社会では、政治動員は異なる影響をもつのであろうか？



仮説

IS台頭後のイラクでは著しい政治不信が広がり、それが投票率低下の一因になった。我々が実施した過去3回の世論調査でも、「投票しない」回答が最大である。こうした状況下においても、理論的に見れば、政治動員を受けた有権者は、投票所に足を運ぶものと思われる。

選挙キャンペーン時に電話動員を受けると投票参加する。ライバル政党が有利という情報を受けると投票参加する。



実験デザイン 政治動員の効果を調べるため、スプリットサンプルで調査対象者をランダムにA,B,Cの3グループに分割し、AとBを実験群、Cを統制群とした。Aグループには「あなたの支持政党から電話がかかってきました。「我が党が選挙で議席を増やすために投票に行ってください」と言っています。あなたは投票に行きますか？」と尋ね、Bグループには「あなたの支持政党から電話がかかってきました。「敵対している政党が選挙で大きく議席を増やしそうだ、投票に行ってください」と言っています。あなたは投票に行きますか？」と尋ねた。Cグループには「あなたは次の選挙で投票に行きますか？」とだけ尋ねた。データは多重代入を施し、欠測問題に対処した。

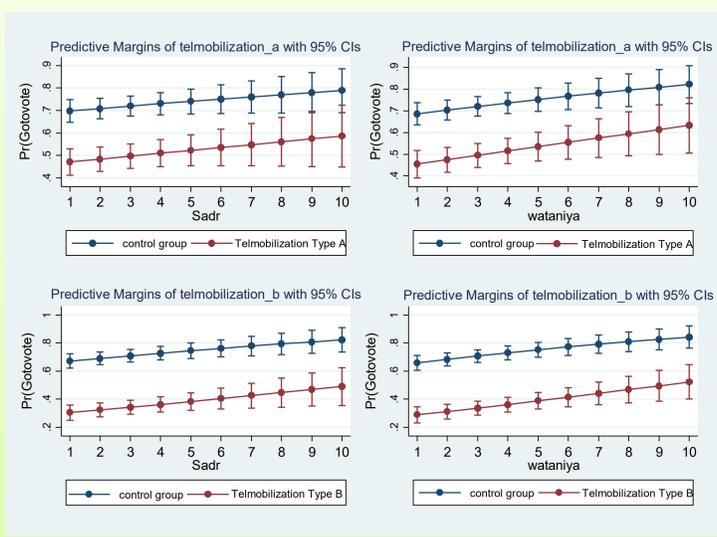
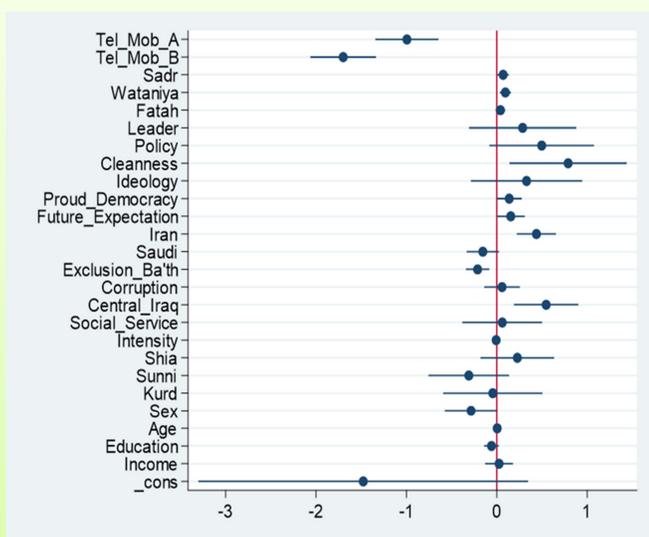


A:我が党が選挙で勝つように



アンダードッグ効果？

B:敵対政党が勝ちそうだ



分析結果

【左パネル】統制群(Cグループ)を参照カテゴリとした時、電話動員を受けた実験群Aグループの方が投票参加意思は低くなる。アンダードッグ効果を想定した実験群Bグループの投票参加の意思はさらに低い。

【右パネル】横軸に政党への感情温度計を、縦軸に投票参加確率を取ったグラフであり、左半分は政党がサドル派、右半分はワタニーヤである。上半分は実験群Aと統制群の比較であり、右半分は実験群Bと統制群を比較している

結論

政治不信が蔓延しているポスト紛争社会において、動員は逆説的に投票率を下げる効果をもたらしている。汚職の蔓延と有権者を無視した政治エリートのみでの利権争いが著しい政治不信と信頼の欠如を生み出している。その結果、有権者は選挙で動員されることに対する嫌悪感にも近い感情を抱くようになった。イラクの2018年議会選挙では、深刻な政治不信のなかで各政党が有権者を真摯に動員したからこそ、投票率が大幅に低下したと結論づけられる。

現地の政治的文脈を考慮すると、電話動員が棄権を引き起こす現象、とりわけ「敵対勢力が勝ちそうなので投票して欲しい」というメッセージは「逆アンダードッグ効果」と呼ぶことができるだろう。イラクの事例では選挙後、各政党が選挙同盟を解消し、連立政権形成のための交渉を開始する。このため動員電話は支持政党の交渉力が弱いことを意味するシグナリングではないか、と解釈できる。